



モニタリングサイト1000 調査速報

平成28年度

干潟 Tidal Flats

はじめに

我が国の沿岸域は、磯、干潟、アマモ場、藻場及びサンゴ礁に代表される生物多様性の高い貴重な生態系を有しています。

私たちは、これらの生態系から魚介類や海藻などの食料を得るとともに、潮干狩りや観察会などの余暇や教育活動の場としても利用しています。また、これら沿岸域生態系の機能（水質の浄化、台風等による高波を防ぐ作用、二酸化炭素を吸収する働きなど）は、私たちの生活に様々な恩恵をもたらしてくれます。

「干潟」とは？

砂泥質の遠浅な海岸であり、内湾や河口域などの波の穏やかな潮間帯に形成される平な地形を示します。

干潟は潮の満ち引きがあるため、干出時には鳥類（シギ・チドリなど）のえさ場として、冠水時には稚仔魚の生育場として多くの生物に利用されます。また、陸水域から流入する有機物等を生物が利用するため、干潟には水質を浄化する作用などもあります。

永浦干潟サイト (熊本県)



ハクセンシオマネキ

干潟調査

平成20年度から「毎年調査」と「5年毎調査」の2つの調査により、各サイトの複数エリアで底生生物（貝類・カニ類・ゴカイの仲間）などの群集組成を調べることで干潟の長期変化をとらえ、生態系保全対策のための基礎情報を得ています。

平成28年度の調査では、日本沿岸の8箇所のサイトで9度目となる毎年調査を実施し、干潟表面や底土中に生息する生物の種類や数の変動を調べます。

中津干潟サイト (大分県)



カワアイ (左) とヘナタリ (右)

松川浦サイト (福島県)



マツカワウラカワザンショウ

厚岸サイト (北海道)



サビシラトリ

松名瀬干潟サイト (三重県)



オカミミガイ

盤洲干潟サイト (千葉県)



クシテガニ

汐川干潟サイト (愛知県)



ウミニナ

石垣川平湾サイト (沖縄県)



ルリマダラシオマネキ

南紀田辺サイト (和歌山県)



コゲツノブエ

英虞湾サイト (三重県)



イボウミニナ

速報掲載更新履歴

- 2016. 9. 6 盤洲干潟サイト [▶ Link](#)
- 2016. 9. 6 汐川干潟サイト [▶ Link](#)
- 2016. 9. 6 松川浦サイト [▶ Link](#)
- 2016. 11. 14 厚岸サイト [▶ Link](#)
- 2016. 12. 19 永浦干潟サイト [▶ Link](#)
- New!** 2017. 1. 27 松名瀬干潟サイト [▶ Link](#)
- New!** 2017. 1. 27 英虞湾サイト [▶ Link](#)
- New!** 2017. 1. 27 南紀田辺サイト [▶ Link](#)
- New!** 2017. 1. 27 中津干潟サイト [▶ Link](#)
- New!** 2017. 1. 27 石垣川平湾サイト [▶ Link](#)

● コアサイト
● 協力サイト

参考情報

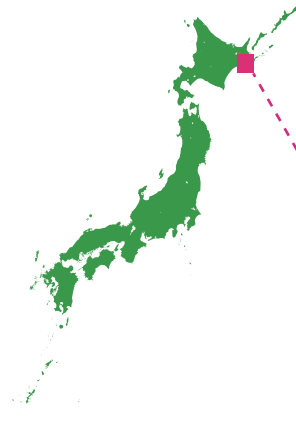
- 平成27年度モニタリングサイト1000 干潟調査速報 [▶ Link](#)
- 平成27年度モニタリングサイト1000 磯・干潟 調査報告書 [▶ Link](#)
- モニタリングサイト1000沿岸域調査 磯・干潟・アマモ場・藻場 2008-2012年度とりまとめ報告書 [▶ Link](#)



厚岸サイト

-北海道厚岸町-

- ▶ 北海道東部の別寒辺牛川流域の湿原から厚岸湖を通じて厚岸湾に至る水系に属する干潟です。
- ▶ 厚岸湾北湾奥の前浜干潟では、二枚貝のサビシラトリ等の北方に分布する種がみられます。また、厚岸湖の河口干潟の陸側には塩性湿地が広がり、希少生物であるアッケシソウやアッケシカワザンショウがみられます。



▲ Aエリア：厚岸湾北奥部に位置する前浜干潟



▲ Bエリア：厚岸湖の東側最奥部に位置する河口干潟

▼ ウバガイ



c



d

▲ オホーツクヘラムシ

2016年度 調査結果概要 B エリア

定量調査では、ホソウミニナ、オオノガイ、サビシラトリガイ等の貝類が多く確認されました（写真 f）。定性調査では、今年度も希少種であるアッケシソウやアッケシカワザンショウガイが確認できました（写真 g）。昨年度の調査と比較すると、内在性動物の種数や個体数が共に少ない傾向がみられました。また、例年よりもコアマモの被度が若干低くなっているような印象を受けました。



f

▲ 優占種のホソウミニナ

▼ アマモの実生



e

2016年度 調査結果概要 A エリア

定量調査では、アサリ、ミズヒキゴカイ等の多毛類が多く確認されました。定性調査では、ウバガイやエゾバイ類等の貝類、オホーツクヘラムシも確認されました（写真 c、d）。また、例年の調査でみられるアマモの実生に加えて、今年度はコアマモの分布が確認できました。昨年度に引き続き後背地では護岸工事が進んでおり、沿岸域への波浪が変化したことにより、潮間帯上部の面積が減少していた一方で潮間帯下部～潮下帯上部の面積が増加していました。



g

▲ 希少種であるアッケシソウとアッケシカワザンショウガイ（矢印）

□ 調査日 2016. 7. 6 -7

□ サイト代表者：仲岡雅裕
(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

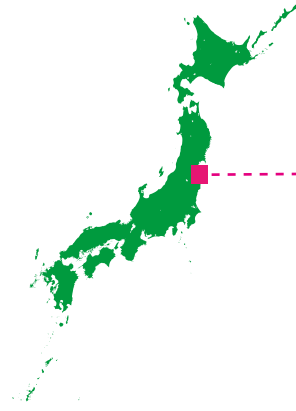
仲岡雅裕 (北海道大学) 【a~g】
桂川英徳 (北海道大学)
橋本真理奈 (北海道大学)

寺西琢矢 (北海道大学)
難波瑞穂 (北海道大学)
Carter Smith (University of North Carolina at Chapel Hill)

Vanessa Herhoffer (Kiel University)
濱野章一 (北海道大学)

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 28 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf)

松川浦サイト - 福島県南相馬市 -



- ▶ 仙台湾の南端部に位置し、砂州によって太平洋と隔てられた南北に細長い潟湖に形成された東北地方最大級の干潟です。
- ▶ 震災以前は 200 種ほどの底生動物が確認されており、種多様性が高い干潟でした。
- ▶ 仙台湾沿岸の干潟へ底生動物を供給する役割をもった干潟の一つです。



a

▲ A エリア：陸側にはヨシやシバナなどを植生とする塩性湿地が広がっています。干潟表面には緑藻が繁茂し、ホソウミニナやマツカワウラカワザンショウが高密度で生息していました。潮下帯では、アマモの生育面積が拡大しつつあります。



b

▲ B エリア：悪天候により潮が引かない中、腰まで浸かりながら調査する様子。北風も強く、寒さに震えつつ調査を実施しました。



c

▼ ツバサゴカイの棲管：干潟から一対の棲管（棲み家）が突き出している様子がみられます。各地で絶滅の危機に瀕している大型の多毛類。



d

▲ ユウシオガイ：二枚貝類。震災以後あまりみられなくなりましたが、個体数が回復傾向にあります。

2016年度 調査結果概要 B エリア

今年の調査では、例年より大型のイソシジミの個体数が減少していたようでした。また、本エリアの生物群集の特徴である汽水性種（ムロミスナウミナナフシ（写真 f）、カワゴカイ属、*Heteromastus* sp.（写真 g）、ヤマトスピオなど）は、例年同様に生息を確認することができました。一方で、特に定性調査では、悪天候で潮が引かなかったことや降雨による塩分濃度の低下などが、調査結果に影響を与えた可能性があります。



f

▲ ムロミスナウミナナフシ：汽水域の底土中に生息する等脚目の一種。A、B エリアともによくみられます。



e

▼ マツカワウラカワザンショウ：殻高 2mm ほどの小型の巻貝類。A エリアの干潟表面で多数確認できます。

2016年度 調査結果概要 A エリア

例年同様、希少種のツバサゴカイ（写真 c）やユウシオガイ（写真 d）が比較的高密度で生息していました。昨年度までと比較して、大型のアサリが多数出現しました。おそらく震災後に加入した個体が、順調に成長しているものと思われます。また、干潟表面に優占するホソウミニナやマツカワウラカワザンショウ（写真 e）についても、昨年度よりさらに個体数が増えたようでした。



g

▲ *Heteromastus* sp.：B エリアで優占する多毛類の一種。各地の汽水域でみることができます。

□ 調査日 2016.6.23 -24

□ サイト代表者：金谷 弦（国立環境研究所）

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

金谷 弦（国立環境研究所）【a~g】
鈴木孝男（みちのくベントス研究所）

多留聖典（東邦大学）
海上智央（自然教育研究センター）

青木美鈴（WIJ）

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 28 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf)

盤洲干潟サイト - 千葉県木更津市 -

- ▶ 東京湾東岸部に位置する小櫃（おびつ）川の河口部より広がる砂質干潟で、東京湾で現存する最大級の面積の干潟です。また、「日本の重要湿地 500」に選ばれています。
- ▶ 外周を形成する砂質の前浜干潟ではアサリや多毛類などがみられ、泥質が強い小櫃川右岸の三角洲の後背湿地では、ヨシや転石の間に巻貝やカニ類、濡筋（みおすじ）には多毛類が多くみられます。

▼ ツボミ（黄印）：巻貝（写真はホソウミニナ）の殻に付着して生息。東京湾では非常に稀です。本調査にて数十個体が確認できました。

▼ ギボシマメガニ：ミサキギボシムシを宿主として共生するカニ。東京湾での過去の出現情報は、宿主（ミサキギボシムシ）同様にほとんどありません。



2016年度 調査結果概要 Aエリア

定量調査では、潮間帯上部と下部ともに例年同様の種がみられ、少数の種が多数個体出現していました。定性調査では、今年度もフトヘナタリやミサキギボシムシの生息を確認できました。また、潮間帯下部ではホソウミニナの殻に付着するツボミ（写真c）が複数個体みられました。本事業の盤洲での初記録種として、ギボシマメガニ（写真e）・アカホシマメガニ・多毛類の複数種が確認されました。また、ここ数年減少傾向にあったカイヤドリウミグモ（写真d）が底質中やアオサに付着したアサリ内からも発見されました。

▲ カイヤドリウミグモ：二枚貝に寄生。2007年に東京湾で大発生。今年度は多数確認されました。

2016年度 調査結果概要 Bエリア

例年同様、定量調査では出現種数・個体数ともに少なく、定性調査では転石や植生帯に出現する種や大型で移動性の高い種、低密度の種が多く発見されました。また、潮間帯上部では、2014年度調査以降みつかっていなかったヒメアシハラガニ（写真f）が複数個体確認できた上、河道の際ではウミニナ（写真g）が複数個体確認されました。近年、本調査エリア近傍のヨシ原では希少な種であるシオマネキの生息が報告されていますが、本調査では確認できませんでした。



▲ ヒメアシハラガニ：干潟の表面に複数個体が確認できました。アシハラガニの小型個体に似ていますが、歩脚が長く第3歩脚の毛が目立ちます。

▲ ウミニナ：現在の東京湾では非常に数が少なくなっています（調査にて発見できた個体を並べて撮影）。ホソウミニナに混じって生息していました。



▲ Aエリア：潮間帯下部の様子。干潟の表面にはホソウミニナが多産し、小規模なアマモパッチがみられました。



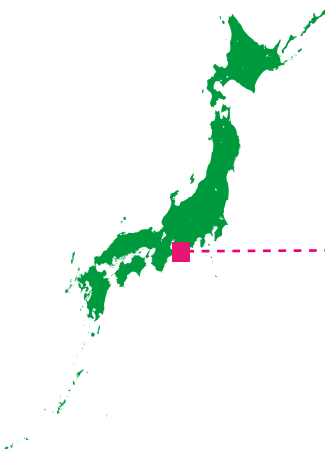
▲ Bエリア：潮間帯下部の河道際にて調査する様子。ヨシ原際が侵食を受けて削られ、ヨシ原内に多くの漂着物がみられました。

□ 調査日 2016.6.8-10
 □ サイト代表者：多留聖典
 （東邦大学理学部東京湾生態系研究センター）

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】
 多留聖典（東邦大学） [a~g]
 阿部博和（東邦大学）
 金谷 弦（国立環境研究所）
 海上智央（自然教育研究センター）
 青木美鈴（WIJ）
 尾島智仁（日本水中科学協会）
 田中正敦（東邦大学）

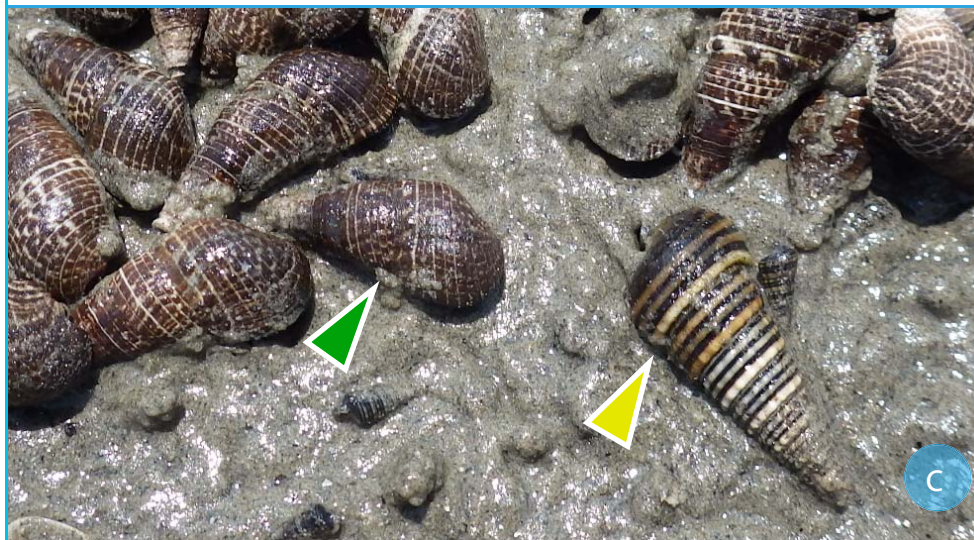
このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
 出典：モニタリングサイト1000 平成28年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf

汐川干潟サイト - 愛知県豊橋市・田原市 -



- ▶ 愛知県の渥美半島と知多半島に挟まれた三河湾奥の東側に位置する田原湾にある干潟です。
- ▶ 干潟表面にはウミニナ・ヘナタリなどの巻貝、底土中にはオキシジミ・ユウシオガイなどの二枚貝類やミズヒキゴカイなどの多毛類が数多く生息しています。

▼ ウミニナ（緑印）とヘナタリ（黄印）：今年は特にヘナタリ（黄印）の稚貝が多数みられました。



▼ アナジャコ：大型でおよそ 15cm の大きさでした。



▲ マキガイイソギンチャク（黄印：絶滅危惧Ⅱ類、海岸ベントス RDB）が付着したイボウミニナ（絶滅危惧Ⅱ類、環境省第4次及び海岸ベントス RDB）

2016年度 調査結果概要 Bエリア

干潟の表面全体にはウミニナが分布し、潮間帯上部から中部にはヘナタリが高密度に分布していました（写真 c）。今年は特にヘナタリの稚貝が多数みられました。また、潮間帯上部から下部では、少数ですが希少種であるイボウミニナが確認され、殻上に希少種のマキガイイソギンチャクが生息している個体もみられました（写真 d）。さらに潮間帯中部に分布するマガキ集団の間隙にはフジツボ類や貝類が付着している様子がみられ、潮間帯下部では大型のアナジャコも確認できました（写真 e）。

2016年度 調査結果概要 Cエリア

潮間帯上部から下部の干潟表面には、ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナ・ヘナタリなどの巻貝が分布していました。特に上部では、ウミニナが高密度で分布していました。底土中にはミズヒキゴカイなどの多毛類、オキシジミなどの二枚貝がみられ、潮間帯下部にはアサリの稚貝がみられました（写真 f）。また、今年も外来種のコウロエンカワヒバリガイの生息が確認されました（写真 g）。一方で外来種のヒガタアシ（イネ科植物）の生育は確認されませんでした。



▲ ユウシオガイ（左：1 cm 程度）とアサリの稚貝（右）



▲ コウロエンカワヒバリガイ（外来種）：大型の個体がマガキに付着していました。



▲ Bエリア：汐川河口から田原湾に広がる干潟。今年度は、干潟表面にアオサの堆積はみられないものの、エイ類の食痕と思われるくぼみがみられました。



▲ Cエリア：紙田川河口に広がる干潟。本エリアも表面に多数のくぼみがみられました。Bエリアより泥質ですが、調査開始時に比べると年々砂質化が進んでいます。

□ 調査日 2016.5.23
□ サイト代表者：木村妙子
(三重大学大学院生物資源学研究所)

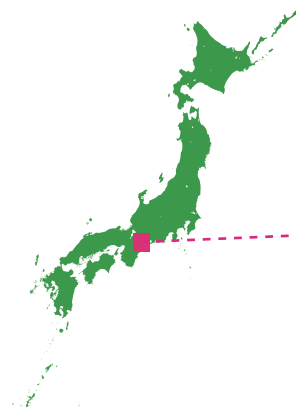
□ 調査者・調査協力者【写真撮影】
木村妙子 (三重大学) 【a~g】
木村昭一 (三重大学)

吉岡志帆 (三重大学)
村山 椋 (三重大学)
島田英樹 (三重大学)

藤岡エリ子 (汐川干潟を守る会)
藤岡純治 (汐川干潟を守る会)

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 28 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf)

松名瀬干潟サイト - 三重県松坂市 -



- ▶ 伊勢湾の西側に位置する干潟です。伊勢湾は三河湾と併せると国内最大面積を誇る内湾です。
- ▶ ヨシ原・塩沼・感潮クリーク、泥質・砂質干潟、アマモ場といった陸から海への移行帯が残存する貴重な場所です。
- ▶ 周辺海域は、アサリ・ハマグリ・ヤマトシジミの好漁場であり、国内有数の魚介類の産地です。

▼ 調査風景：土中に生息している生物を確認するため、2人1組で砂泥を篩（ふる）う様子。



▼ アサリ：今年は個体数が少なかったです。

2016年度 調査結果概要 Aエリア

干潟の中間部に位置する場所では、ネズミボヤが高密度に分布しており、増加傾向にあるようでした。また、潮間帯下部では、小型のハスノハカシパン、ギボシムシ類、チロリ類が観察されました。
後背湿地では、カワザンショウガイ、ホソウミニナ、ヘナタリ、フトヘナタリなどの巻貝類が高密度に分布していました。
今年度は、アサリ・シオフキ・マテガイといった二枚貝類が少なく、外来種のサキグロタマツメタガイも確認されているため、継続したモニタリングが重要です（写真d）。

2016年度 調査結果概要 Bエリア

潮間帯上部ではフトヘナタリやチゴガニ等、潮間帯下部ではウミニナやホソウミニナが干潟表面に分布している様子が観察されました。また、カキ礁では、カキ類の間隙にケフサイソガニやタカノケフサイソガニが生息していました。全体的にウミニナやホソウミニナが例年より少ない印象を受けました。
ヨシ原では、希少種であるオカミミガイやハクセンシオマネキ（ともに環境省レッドリスト：絶滅危惧Ⅱ類）も確認されました（写真e）。



▲ オカミミガイ：巻貝の一種。絶滅危惧Ⅱ類（環境省レッドリスト）



▲ 調査に協力いただいた三重高等学校と三重中学校のみなさん



a

▲ A エリア（松名瀬干潟）：伊勢湾に面した前浜干潟です。潮上部には砂丘を挟んで後背湿地が発達しています。調査時は、潮干狩りを楽しむ人々が多くみられました。



b

▲ B エリア（榊田川）の塩性湿地：榊田川河口部に形成された河口干潟です。底質は砂であり、潮間帯上部にはヨシ原が形成されています。

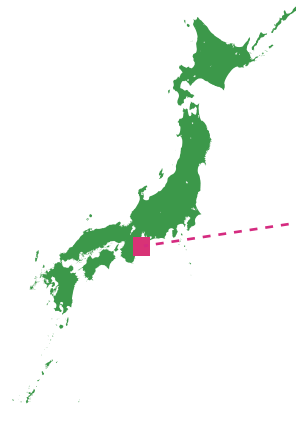
□ 調査日 2016.5.5
□ サイト代表者：木村妙子
(三重大学大学院生物資源学研究所)

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】
木村妙子（三重大学） [a~f]
村山 椋（三重大学）
＜三重高校のみなさん＞
小西伴尚・石井智也・山本凌大
山本洋輝・小山裕暉・水本凱也
西口真呂・西井康高・中谷唯人

＜三重中学のみなさん＞
小島慧音・西村佳直人・岡崎隼人
青山優希・村林 樹・林 祥太郎
高野智紀・仲ノ宮脇壮良・沖田 龍之介

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 28 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf)

英虞湾サイト - 三重県志摩市 -



- ▶ 英虞湾はリアス式海岸特有の小さな支湾が多数形成されている風光明媚な内湾で、真珠の養殖が有名な場所です。
- ▶ 周辺には南日本に特有な海岸植生（ハイネズ、トベラ、ウバメガシ）が確認されるなど、「日本の重要湿地 500」にも選ばれている貴重な場所です。
- ▶ 英虞湾の中央部と北部の湾奥に形成されている前浜干潟で調査を実施しています。



a

▲ A エリア（登茂山）：英虞湾のほぼ中央部に位置し、急峻な崖に囲まれた小湾の奥にある前浜干潟です。潮間帯上部にはハマサジ等の塩生植物がみられます。



b

▲ B エリア（小才庭）：干潟表面の生物の種類と個体数を確認している様子。英虞湾北部の支湾奥部に位置する前浜干潟です。



c

▼ チゴガニ：甲幅 10mm 程度のカニ。本調査サイトでは、甲羅がオレンジ色をしている個体がみられます。（通常は黒紫色から濃茶色が多いです）

2016年度 調査結果概要 B エリア

潮間帯上部ではウミニナとその稚貝が高密度に分布していました（写真 e）。また、その殻上にはツボミガイが付着する様子が観察されました。礫の下からは希少巻貝であるワカウラツボ（環境省レッドリスト：絶滅危惧Ⅱ類）も確認されました。

潮間帯下部では、希少巻貝のヘナタリやイボウミニナが優占しており、二枚貝ではオキシジミ・シオヤガイ・コオキナガイ等、多毛類ではチロリ科やゴカイ科等が確認されました（写真 f）。

上部のヨシ原や転石では、ミヤコドリ・ウスコミミガイ・ナラビオカミミガイといった絶滅のおそれのある種も確認されました。



e

▲ ウミニナ：本サイトの潮間帯上部では高密度で分布しています。



d

▼ シノミミガイ：巻貝類の一種。絶滅危惧Ⅰ類（環境省レッドリスト）

2016年度 調査結果概要 A エリア

潮間帯上部では、特にウミニナが高密度で確認され、稚貝も多くみられました。また、チゴガニやゴカイ類等も数多く確認されました（写真 c）。潮間帯上部の岩場では希少巻貝であるオカミミガイ科のシノミミガイ（環境省レッドリスト：絶滅危惧Ⅰ類）も確認されました（写真 d）。

潮間帯下部では、希少巻貝のイボウミニナ（環境省レッドリスト：絶滅危惧Ⅱ類）やアラムシロが優占するとともに、西日本以北では希少になりつつあるツバサゴカイやムギワラムシの棲管（せいかん）も確認されました。



f

▲ ヘナタリ（左側）とイボウミニナ（右側）：巻貝類の一種。ともに希少種ですが、本サイトでは優占してみられます。

□ 調査日 2016. 4. 24 -25
□ サイト代表者：木村妙子
（三重大学大学院生物資源学研究所）

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】
木村妙子（三重大学） [a, c, e, f] 村山 椋（三重大学）
木村昭一（三重大学） [b, d] 近藤展布（三重大学） 島田英樹（三重大学）

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 28 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf)

南紀田辺サイト -和歌山県田辺市-

- ▶ 紀伊半島南西部の田辺湾に位置する干潟です。紀伊半島沿岸域は黒潮の影響を受けるため、多種多様な海洋生物が確認できます。
- ▶ カニ類や二枚貝・巻貝類の種数が多く、レッドリストに掲載されている希少種が30種以上確認できます。
- ▶ 南紀白浜から田辺湾一帯は、「日本の重要湿地500」にも選定されている場所です。

▼ シャミセンガイ科の一種（殻長およそ1cm）：Bエリアでの記録はありましたが、Aエリアの潮間帯下部では、調査開始以降初めて記録されました。



c

▼ 調査の様子：干潟表面に生息する巻貝等をバットに移し、種類と個体数を調べます。



e



a



d

▲ カワイ：絶滅危惧Ⅱ類（環境省レッドリスト）。ここ数年、Aエリア潮間帯上部で確認できるようになりました。

2016年度 調査結果概要 Aエリア

2012年度調査のBエリアで記録されたシャミセンガイ科の一種がAエリアでも確認されました（写真c）。また、調査開始以来8年連続で希少種のウモレベンケイガニが確認されました。さらに、例年同様にミヤコドリ、クリイロカワザンショウ、カワイ、ヘナタリ、ハザクラガイ、トガリユウシオガイ、スダレハマグリ等の希少貝類やハクセンシオマネキとユビアカベンケイガニが確認されました（写真d）。



b

2016年度 調査結果概要 Bエリア

今年度調査では、イザナミツノヤドカリが、調査開始以降初めて、しかも多数確認されました（写真g）。また、例年同様に希少貝類のムシログイ、ニッポンマメアゲマキ、スジホシムシモドキヤドリガイ（宿主のスジホシムシモドキも含む）、ハボウキガイ、シオヤガイ、ケマンガイ等も確認されました（写真f）。

A・Bエリアともにコゲツノブエが優占し、生物相に目立った変化はみられませんでした。ここ数年ある程度以上の大きさの二枚貝類が少なく、ナルトビエイによる捕食の影響が懸念されます。



f

▲ シオヤガイ：準絶滅危惧（環境省レッドリスト）。A、Bエリア全体に生息しています。



g

▲ イザナミツノヤドカリ：調査開始以降初めて採集されました。

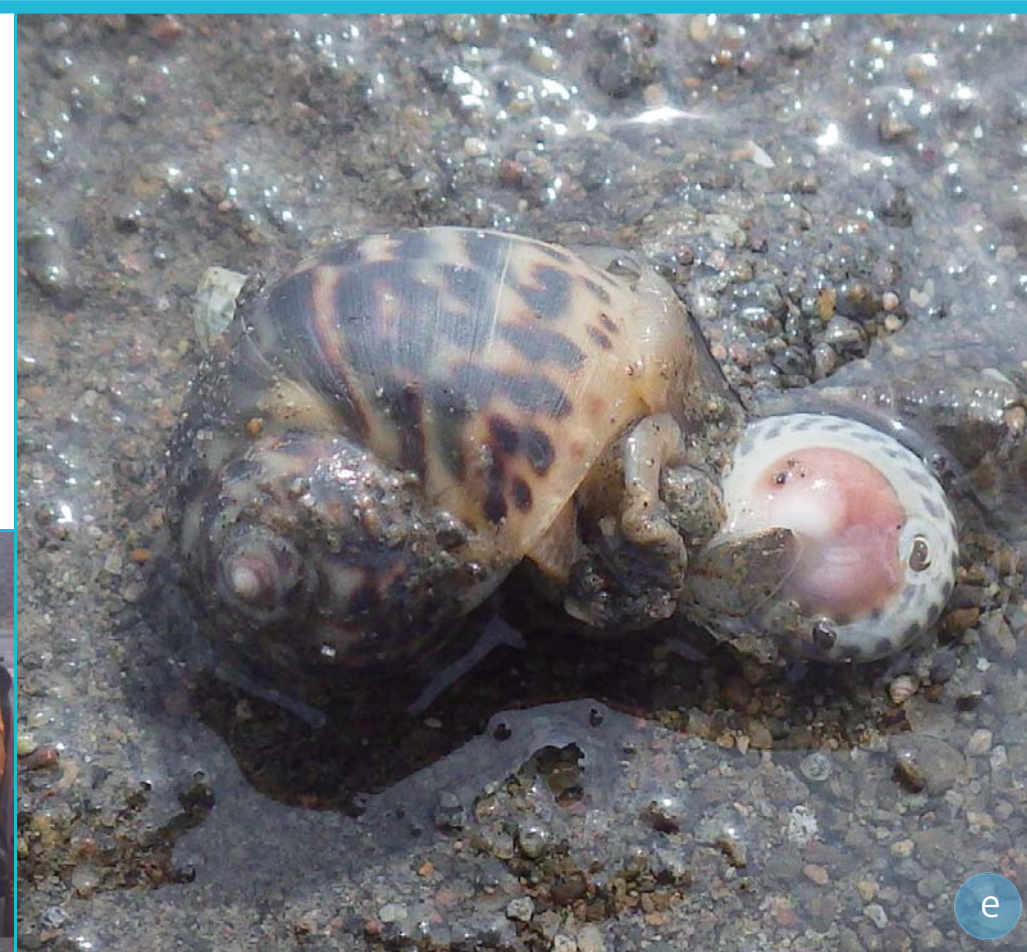
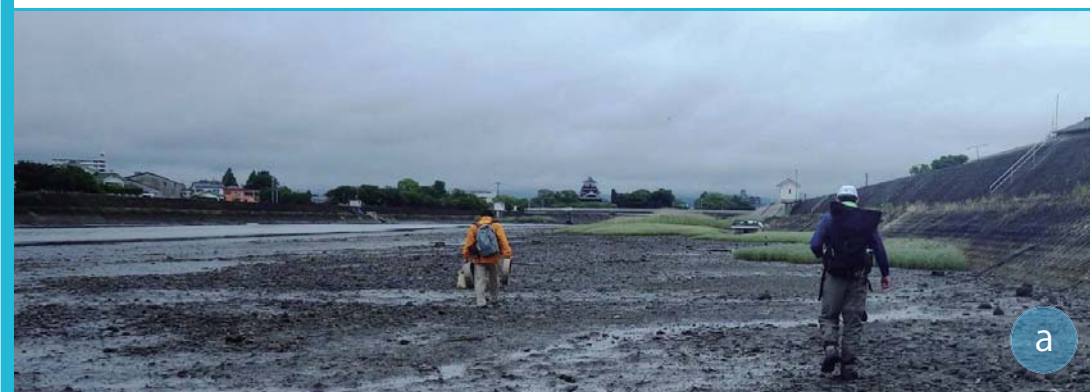
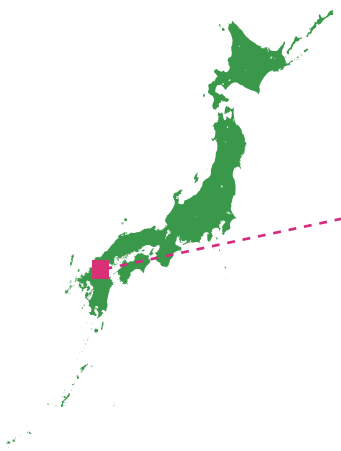
□ 調査日 2016.6.21-22
□ サイト代表者：古賀庸憲（和歌山大学教育学部）

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】
古賀庸憲（和歌山大学）【a-d,f】 香田唯（兵庫県在住） 青木美鈴（WIJ）【e】
塩崎祐斗（和歌山大学） 渡部哲也（西宮市貝類館）【g】 石田 惣（大阪市立自然史博物館）

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト1000 平成28年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf)

中津干潟サイト - 大分県中津市 -

- ▶ 瀬戸内海の南西端に位置する周防灘に面した干潟です。
- ▶ 瀬戸内海では最大面積を誇る自然干潟であり、その環境は一樣ではなく、調査エリアを3エリア設けています。また、絶滅危惧種のカブトガニが生息している数少ない干潟のひとつです。
- ▶ 主に砂質で塩性湿地や転石帯、コアマモ等の植生帯もあり、実に多様な底生動物（ベントス）が生息しています。



▲ 調査風景：調査ポイントへ向かうための装備を整える様子。

▲ ゴマフダマ：巻貝の一種。イボキサゴ(右側の巻貝)を捕食していました。

▲ Aエリア：中津川河口に形成される干潟です。調査地点の塩性湿地へ向かう様子。



2016年度 調査結果概要 B エリア

目立った景観の変化は確認されませんでした。例年に比べてアサリの生息密度が高く、特に潮間帯中部の調査ポイントでは、過去最高の生息密度を記録しました。AおよびCエリアでもアサリの出現数は多く、おそらく昨年秋に多数のアサリが定着したものと推測されます。また、Bエリアでは、これまでCエリアのみで生息が確認されていたイボウミナナが昨年度から観察されるようになりました。



▲ ウミナナ類に付着したシカメガキ（黄矢印）：殻上にはフジツボ類（青矢印）が付着。



▲ ニンジンイソギンチャク：調査ポイントへの移動中に確認されました。

2016年度 調査結果概要 C エリア

年々拡大傾向にあったコアマモの分布域が、今年度は縮小しているようでした。また、イボウミナナの生息範囲が拡大しており、ウミナナに次ぐ高密度で生息していました。例年同様の生物が確認されるとともに、ウミナナ及びイボウミナナに付着しているシカメガキも観察されました（写真f）。また、調査ポイントへの移動中には、ニンジンイソギンチャクや多毛類のムギワラムシ等が確認されました（写真g）。

□ 調査日 2016.6.5 - 7

□ サイト代表者：浜口昌巳
(水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所)

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

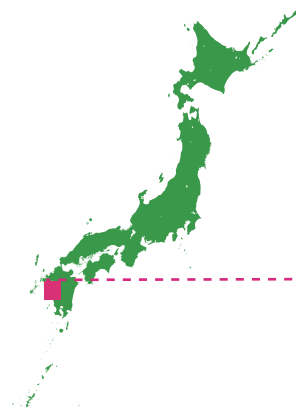
浜口昌巳 (水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所)
梶原直人 (水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所)

西 栄二郎 (横浜国立大学教育人間科学部)

【b,e】 青木美鈴 (WIJ) 【a,c,d,f,g】

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 28 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf)

永浦干潟サイト - 熊本県上天草市 -



- ▶ 有明海と八代海を結ぶ瀬戸に位置する永浦島南部の干潟で、周囲は雲仙天草国立公園に指定されています。
- ▶ 底生動物の種多様性は高く、マキガイイソギンチャク、ウミニナ、テナガツノヤドカリ、ツバサゴカイなどが生息しています。

▼ミドリシャミセンガイ：底質が砂泥質や泥質の場所に生息しています。

▼イボウミニナ（環境省 RL：絶滅危惧Ⅱ類）：ここ数年、増加傾向にあるようです。



2016年度 調査結果概要 Aエリア

ホソウミニナやテナガツノヤドカリ等が例年通り数多くみられるとともに、本エリアではあまり確認されていなかった生物（シマヘナタリ、シオヤガイ、ハマグリ、ミドリシャミセンガイ）も確認できました（写真c）。また、今年度も希少種のイボウミニナを確認できました（写真d）。一方で、塩性湿地では希少な微小巻貝のカワザンショウ科の一種が2013年度以降の調査にて確認できておらず、生物相が貧弱になっている可能性があります。原因の一つとして、海と繋がる水路の水門が閉鎖されたことで、調整池の水位上昇や塩分の低下が起こったことが考えられます。

2016年度 調査結果概要 Bエリア

テナガツノヤドカリ、ホンヤドカリ、アサリ等が数多くみられました。また、本エリアではこれまであまり確認されていなかった生物（マキガイイソギンチャク、イボキサゴ、シオヤガイ、アシビキツバサゴカイ、ヤツデスナヒトデ）が確認できました（写真e）。ミドリシャミセンガイは、今年度も数多くの個体を確認できました。また、ゴマフダマやマテガイは、ここ数年増加傾向にあるようです（写真f）。



▲ Aエリア：「ハクセンシオマネキ群生地」として有名な干潟です。底質は、潮間帯上部は砂泥質、下部は砂泥質又は泥質です。調査当日は時々小雨の降る悪天候でした。



▲ Bエリア：干潟上縁は自然海岸です。底質は、潮間帯上部・下部とも砂泥質ですが、下部では一部が泥質です。潮下帯には小規模ですがアマモが繁茂しています。



▲ ヤツデスナヒトデ：大型のヒトデで、腕の数は8本前後になります。



▲ マテガイ：増加傾向にあるようです。

□ 調査日 2016.4.23 -24
□ サイト代表者：逸見泰久
(熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター)

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

逸見泰久 (熊本大学) 【a~f】
岡本浩太郎 (熊本大学)

笠原悠生 (熊本大学)
北岡 匠 (熊本大学)

田中恭子 (熊本県上天草市)
逸見高志 (熊本県熊本市)

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 28 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf)

石垣川平湾サイト

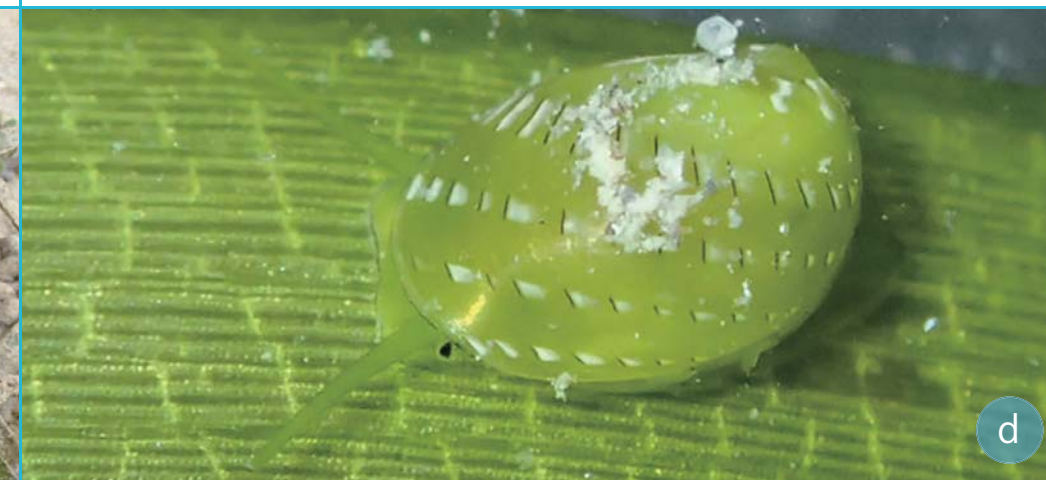
- 沖縄県石垣市 -

- ▶ 石垣島西北岸にある内陸に入り込んだ川平湾に位置する干潟です。
- ▶ 琉球列島固有種のリュウキュウコメツキガニとミナミコメツキガニがみられ、二枚貝のウメノハナガイもよく確認されます。
- ▶ 川平湾と後背の於茂登岳一帯は、その美しい景観と地域固有の文化史的価値から、国の名勝に指定されています。

▼アカミシキリ：ナマコ的一种。潮間帯下部のアマモ場で確認されました。



▼クサイロカノコガイ：巻貝的一种。アマモ類の葉上で観察されました。



2016年度 調査結果概要 Aエリア

例年同様、ウメノハナガイやミナミコメツキガニ等の優占種に目立った変化はみられませんでした。潮間帯下部のアマモ場内では、アカミシキリやクサイロカノコガイが確認されました（写真c、d）。また、これまで死殻しか確認されなかった二枚貝のヒメツキガイの一種の生体が、本調査開始以降初めて定性調査で確認されました。

2016年度 調査結果概要 Bエリア

例年同様、ウメノハナガイやミナミコメツキガニ等の優占種に目立った変化はみられませんでした。潮間帯下部の定性調査では、トゲムシロやタイワンガザミ等が確認されるとともに、本調査開始以降初めてツマベニマメアゲマキの生体が確認されました（写真e、f）。また、これまで死殻でしか確認されなかった二枚貝のオトゲウネガイの生体が、本調査開始以降初めて定量調査で確認されました。



▲トゲムシロ：巻貝的一种。潮間帯下部で確認されました。



▲ツマベニマメアゲマキ：二枚貝的一种。潮間帯下部の転石帯で、本調査開始以降、初めて生体が確認されました。



▲ Aエリア：湾口部に位置する干潟です。例年よりアマモ場が拡大しているような印象を受けました。



▲ Bエリア：湾奥部に位置する干潟です。表面にはミナミコメツキガニ等に掘り起こされた跡が数多くみられました。

□ 調査日 2016.6.4-5
□ サイト代表者：岸本和雄
(沖縄県農林水産部)

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】
岸本和雄 (沖縄県農林水産部) [a~f] 久保弘文 (沖縄県水産海洋技術センター) 村山雅庸 (石垣市在住)
狩俣洋文 (沖縄県農林水産部) 藤田喜久 (沖縄県立芸術大学) 矢野暁嗣 (石垣市在住)

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 28 年度干潟調査速報 (環境省生物多様性センター)
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h28.pdf)